

吉田松陰が見た奥津軽

嘉永4(1851)年12月14日、22歳の吉田松陰は江戸の長州藩邸より出奔し、熊本藩の宮部鼎三等と水戸で落ち合い、北日本歴遊の旅につきました。嘉永5年(1852)閏2月29日津軽入りを果たし、3月3日板柳、五所川原、富野を経て、中里にいたりました。中里では豪農加藤八九郎家に宿泊し、翌4日北へ向けて出発しました。

松陰の東北巡遊は、広く各地の志士と交わって国事を話し、民情を視察し、殊に津軽半島に出没する外国船に対する防備の有様を見ることにありました。その旅は苦勞の連続でしたが、安らぎの一時もありました。十三瀉(十三湖)の瀉縁を過ぎ、小山を越えたところ、眼前には初春の穏やかな風景が広がっていました。松陰は日記に次のように記しています。
“山は瀉に臨みて岩城山に對す。真に好風景なり”

昭和6年5月、土地の有志は松陰がこの地に遊んだことを記念し、建碑を企画し、碑背の撰文は青森県知事守屋磨磋夫に托し、碑表は徳富蘇峰の揮毫に成る「吉田松陰遊賞之碑

蘇峰・菅正敬書」と彫った碑を、十三湖の旧小泊道と現在の国道の分岐点に建てました。

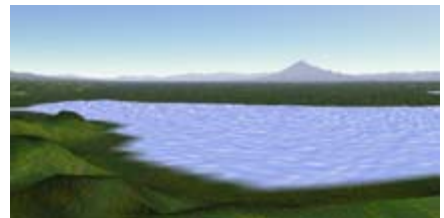


【碑文】(表)吉田松陰遊賞之碑 蘇峰菅正敬書
(裏)松陰先生曾遊記念碑

嘉永四年十一月長藩士吉田松陰与肥藩士宮部鼎蔵北遊自江戸至水戸越五年正月

經会津新潟航佐渡更入北奥行過内瀉今泉七平忽見萬頃一碧如鏡汀渚盤回雲煙吞吐鳧鷗翔漁歌互答而白扇之懸天外者為津軽富士二士在行旅五閱月備嘗艱苦至是始開快適之顔云嗚呼海内以名勝稱者千百何限而不得名士揚其輝則霧中花月雲外月耳雖百世無知矣央豐之耶馬溪依頼氏以著我十三瀉頼二士以彰東西呼應成神州之美固其所也以此地僻在一方其美不遠見為憾耳朝近舟車之便千里如比諸昔同帶双刀以拳峻嶺駕一葉以凌双瀉其難易苦樂果如何也余知其不遠千里而來者可日相踵也頃鄉之有志胥謀建石 諸江湖全應囑記之

青森県知事正五位勲四等 守屋磨磋夫撰 従五位医学博士 久保木保寿書 昭和六年歳次辛未五月



【口語訳】松陰先生がかつて遊んだことのある地の記念碑

嘉永四年十一月、長州藩士吉田松陰と肥後藩士宮部鼎蔵が北方を旅した。江戸より水戸に至ったが、やがて年を越して翌五年の正月には、会津新潟を経て佐渡に船で渡った。更には北奥州に入り、旅を続けていくと、内瀉村今泉を過ぎあたりで、突如として非常に広く、一面碧の鏡のような瀉が見えてきた。渚はぐるぐると回り、雲と靄を吐いたような、また呑み込むような感じである。カモやカモメも飛び回っている。漁師達の歌声も互いに響き合い、また天高く懸けている白扇のような津軽富士である。二人が旅に在ったのはもう半年にもなる。いろいろな苦しみを嘗めてきたが、ここに来て始めて快適な気分となり、顔も綻んできたという。嗚呼、国内で名勝だと称しているところは何千何百と限りないだろうが、有名な人がそのすばらしさを賞しなければ、霧の中の花や、雲の外の月のようなもので、百代たってもその名が知られることもない。九州の中央にある耶馬溪も頼山陽氏によってその名を著したのである。わが十三瀉も、松陰、鼎蔵両士によって、この世にその名が知られるようになった。このように東と西がともに日本の美となったのは、もちろんこのようなことからである。ただこの地は一方に偏っているため、その美しさは、遠くて容易に見ることができないのが残念である。近年は、船や車の便もよくなり、遠く離れてもあたかも隣にでも行くような感じになってきたが、昔は両刀を帯びて険しい嶺をよじ登ったり、小さな船一つで怒瀉を乗り越えたりしたものである。その難しさと易しさ、また苦しさ楽しさというもの、考えてみるとどんなものなのか。私は千里といっても遠くないという者達が、日毎踵を接して走ることを知っている。この頃、里の有志が互いに相談して、石碑を建てることを広く世間に告げたが、私はこの求めに応じてこれを記したものである。

[参考] 柳沢良知 2000 吉田松陰 津軽の旅、藤元徳造 吉田松陰の東北紀行 その津軽路を辿る



二日 翳。新邸に至りて荒谷貞次郎を訪ふ。山鹿素水の弟なり。七年前、藩定府の士十七名を遣はして国に就かしめ、新たに邸を城門の前に構へて之を置く。荒谷も亦遣中に在り。城の四面をめぐりて帰る。將に発せんとして結束して伊東を訪ふ。伊東二絶を賦して吾が二人を送る。余、其の一詩の韻に次して云はく。

男兒欲略北夷陸 男兒北夷のほとりを略せんと欲す
難奈吾無官萬師 いかんともし難し吾れに百萬の師なし
猶忻半日高堂話 なほ忻ぶ半日高堂の話
幸為此行添一奇 幸に此の行の爲めに一奇を添へしを

鈴木善次郎も亦至る、談論之を久しうし、辞して出づれば則ち日已に申なり。城市を離れ、一橋を越え、藤崎に至りて宿す。行程僅かに一里。弘前杉森に劇場あり、近日技を演ずと云ふ。田地の制、二百坪を以て一人役と称す。然れども盈縮一ならず、肥瘠も亦殊なり。其の穀を収むるは三苞より四五苞に至り、間々八九苞なるものあり。苞は四斗を容る。租は三斗より六斗に至り、多寡も亦同じからず。而して又収少なくて租多く、租少なくて収多きものもあり。田法の均しからざるは天下の通幣なり。而して其の均しからざるを均しくせんと欲すれば、則ち豈々の民、乗除の在る所を知らず、疑ひて以て下を損ひ上を益するの政と以爲ふ。豪農富戸従つて之を唱へ、遂に謗議洵々たるを致し、民生安からず、水府の政事も是れのみ。是れ治民家の当に深察長思すべき所なり。



三日 晴。藤崎を發す。板柳、鶴田を経て御所河原に至る。此れより金木を経て中里に至る。是れを本道と爲す。土人の誤る所となり赤堀に至る。舟にて岩城川をわたり、西岸を下りて蒲原に至り、復た川をわたり、富野に至りて川を離れる。川は源を矢立嶺に發し、石川、藤崎を経て十三瀧に注ぐ。藤崎よりここに至るまで、路、常に川と相隨う。ここに至りて右折し、路を田間に取り、中里に至る。行程十一里、故を以て稍遠し。



四日 晴。駅を發す。今泉・合津を經、十三瀧の辺を過ぎて小山を越ゆ。山は瀧に臨みて岩城山に対し、真に好風景なり。山を下りて海浜に出で、磯町・脇本を經。脇本は戸数百三四十、去年夷船の過ぎしはここを去ること里許なり。山を越えて小泊に出づ、亦海浜なり、戸数三百。行程七里。ここと松前とは海を隔てて相距ること七里なり。

五日 晴。戸を推して望むに、松前の連山、咫尺の間に在り。駅を出で、海に沿ひて砲台の下を過ぐ。砲二座を安く。板屋を以て之を掩ひ、砲長口径を詳かにするを得ず。行くこと二里、海を離れて山に入る。山に澗あり、澗に沿ひて登る。是れを寒沢と爲す。藩、旅人の此の路を過ぐるを嚴禁す、故を以て道を修めず。澗を渉ること数次、深さ毎に膝を没す。行くこと里許、始めて其の巖に至る。巖を越えて下ること二里許り、雪の深さ二三尺、愈々下れば澗流愈々大なり、又渉ること数次、困苦太甚し。詩を作りて云はく、

去年今日發巴城 楊柳風暖馬蹄輕 今年北地更踏雪 寒沢州里路難行
行尽山河万夷險 欲臨滄溟叱長鯨 時平男兒空慷慨 誰追飛將青史名

海浜に出づ、是れを三厩と爲す。俗に伝ふ、義経松前に騎渡するにここよりすと。戸数百許り、港湾は舟を泊すべし。松前侯の江戸に朝するにも、舟に乗りて亦ここに到る。今別を經。戸数港湾、亦三厩と相類す。大泊を經て寝月に宿す、戸数僅かに十七八のみ。行程八里小泊、三厩の間、海面に斗出するものを竜飛崎と爲す、松前の白神鼻と相距ること三里のみ。而れども夷船憧々として其の間を往来す。これを榻側に他人の酣睡を容すものに比ぶれば更に甚だしと爲す。苟も士氣ある者は誰れか之れが爲めに切齒せざらんや。独り怪しむ、当路者漠然として省みざるを。竜飛崎の近地に五村あり、上宇鉄、本宇鉄、釜沢、六十間、筆島と曰ふ、戸数共に六十許り。其の人物旧くは蝦夷人種に係りしも、今は則ち平民と異なるなし。夫れ夷も亦人のみ、教へて之れを化さば、千島、唐太も亦以て五村と爲すべきなり。而るに奸商の夷を待つは、則ち蓋し人禽の問を以てすと云ふ。噫、惜しむべきかな。



松陰遺稿

奉拝鳳闕詩 嘉永6年10月2日 24歳 松陰在京都 中里町 山口 鍊 氏蔵

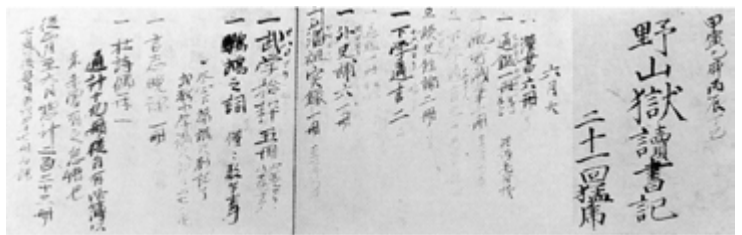
山河襟帯自然城 (京都は) 山河がとり囲んでいて、自然の城郭をなし、
東来無日不憶帝京 東上して以来毎日、この帝都のことを憶っていた。
今朝盥嗽拝鳳闕 今朝、手を洗い口をすすいで(身を清めて) 吉城を礼拝したが、
野人悲泣不能行 自分は悲泣の涙がやまず、立ち去ることもできずにいる。
鳳闕寂寥今非古 皇居はもの寂しく荒れ果てて、今は昔日のおもかげはなく、
空有山河無変更 変わらぬ姿の山河がむなしくあるばかりだ。
聞説今上聖明德 お聞きすれば、今上の孝明天皇は、聖明の徳にみちておられ、
敬天憐民癸至誠 天を敬い民を愛されることは、その至誠の心から出ており、
鷄鳴乃起親齋戒 鷄の声と共にご起床され、みずから身をお清めになり、
祈掃妖氛致太平 邪気(外敵)を一掃し太平の世を招き寄せようとしてされているという。
従来英皇不世出 これほど英邁な天皇がいつの世にもいらっしゃるとはいえないのに、
悠々失機今公卿 (時世の動きに) なすこともなく好機を逸しているのは今の公卿だ。
人生如萍無定在 人生は浮草のようなもので、どうなるか定めのないものであって、
何日重拜天日明 いつの日に再び今上天皇のご聖明を拝することができるだろうか。



嘉永6年24歳の秋、松陰は長崎に停泊中のロシア艦によって海外に密航しようと考え、9月18日江戸を出発した。途中10月1日京都に立寄り、梁川星巖より孝明天皇の時局に対する御深憂を承り、恐懼感激、2日朝御所を拝し、「野人悲泣して行くこと能はず」という程の感動でもって詠まれた詩である。

野山獄讀書記 安政元年~4年 松陰在野山獄 萩市郷土博物館蔵

野山獄讀書記は安政元年10月24日、松陰が萩の野山獄に投じられてより同4年11月に至る間に読了した典籍名を主として記録し、時には対読者の姓名を付記し、まれにその短評を加え、また習字の記録を挿入し、あるいは作文著述の題目ないし講義書目等を月次によって列記したものである。



ただし、松陰は安政2年12月15日に獄を免ぜられて杉家の幽室に帰ったから、厳密にはこの書名は右期間中の一時期をあらわすにすぎないが、これは入獄当初に作製した帳簿にこの書名を伏したまま帰宅後もつづけて使用したことにもとづくものである。読書量は安政元年10月24日から同年末まで106冊、同2年512、同3年505冊、同4年11月まで492冊となっている。原本は松陰が安政6年5月江戸に送られる時、門人佐世八十郎(後の前原一誠)に贈ったものである。

士規七則 安政2年(1855)26歳 松陰在野山獄 萩市郷土博物館蔵

士規七則は、野山獄における思索の間に執筆したものを、叔父玉木文之進の添削を経て成ったものであり、たまたま加冠を迎えた玉木の嫡男彦介にその大成を祈念して贈られた。



第一則は人間の人間たる所以を、第二則は皇国民の立場を、第三則と第四則は個人としての士道の在り方を述べ、第五則以下では士の道を確認するための心がけるべき事柄を記している。なお「右士規七則、約して三端と為す。」に始まる後文の、「端」の語は、端緒の端で物事のきっかけ、糸口を意味するもので、「立志・択友・読書」の三者を以て七則を確実に自分のものにするための不可欠の端緒としていると解すべきであろう。「士規七則」が松山村塾生たちの指針とされたことは言をまたないが、戦前の男子中等学校の中には、これを生徒の生活指針として活用したところも少なくなかったようである。

孫子評注(抄) 安政6年(1859)5月10日 30歳 松陰在萩松本 萩市郷土博物館蔵

『孫子評注』は中国の兵書『孫子』についての評注である。「跋」及び「再跋」によると、松陰が初めて『孫子』の評注を試みたのは安政4年頃と思われるが、このときに成ったものは『孫子』の本文に傍注を施した程度のもので、現在『孫子素本』とよばれているものである。その後、「正文を分析して」評注を加え、翌安政5年8月に成ったのが、今日みられる『孫子評注』の原形である。松陰は更に「塗抹改竄」して、安政6年4、5月の頃に自ら浄書して久坂玄瑞に贈っている(久坂本)。



至誠訓 安政6年5月18日 30歳 松陰在萩野山獄 萩市郷土博物館蔵

松陰の生涯は、「至誠」の工夫において一貫していた。本文は、安政6年5月18日、則ち江戸に檻送される数日前に、松下村塾の後継者小田村伊之助に贈ったものである。小田村は松陰の義弟(妹寿の夫)に当たり、深い信頼を寄せていた。

本文は、東行に当たって、自分の思想・信条の根幹をなしている「至誠にして動かざる者は未だ之れ有らざるなり」(『孟子』離婁篇上)に対する思いを綿々と述べたものである。

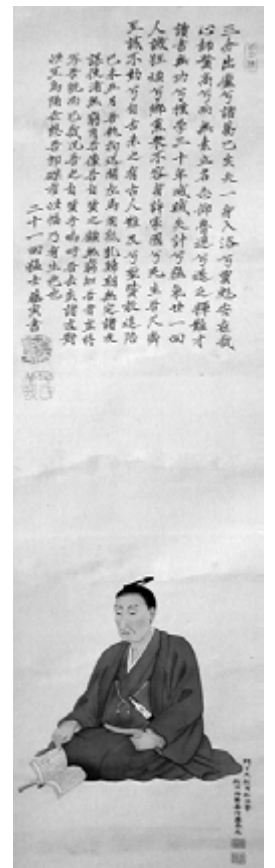
東北亡命、下田踏海、藩主への上書、間部要撃策、大原西下策、伏見要駕策等々、自らの至誠の限りを尽くして計画し、あるいは実行したにもかかわらず、いずれも失敗に終わったことを振り返ってみたとき、どうしても「未だ能く斯の一語を解する能はず」と思わざるを得なかった。『孟子』のこの語が偽りであるのか、それとも自分の至誠の不足によるものなのかを考えずにおられなかった。東行はそれを試す絶好の機会だと思ったのである。



肖像自賛 狩野養州画 安政6年5月 30歳 松陰在萩野山獄 萩市郷土博物館蔵

三分出盧兮諸葛己矣夫	天下三分の計を図り草廬から出仕したという、諸葛孔明はもはやこの世になく
一身入洛兮賈彪安在哉	党禁を訴えるため一身で都に入ったという、あの賈彪はどこにいるというのか。
心師賈高兮而無素立名	私の心はあの壮士の賈高を師としているが、元来世間に立てる程の名声はなく
志仰魯連兮遂乏釋難才	私の志は斉の高士魯仲連を尊敬しているが、結局は難事を解決する才に乏しい。
讀書無功兮撲學三十年	読書もその効果がなく、学問にしたがって三十年になりながら、
滅賊失計兮猛氣廿一回	外夷を滅ぼそうとの企ても失敗した、勇猛心を二十一回振起こそうとしたのに。
人譏狂頑兮鄉黨衆不容	世の人は私を頑固者而非難して、村人は多く私を受け容れてくれないが、
身許君國兮死生吾久齊	吾命は国に捧げており死ぬにしろ生きるにしろ忠誠を尽す心に変わりはない。
至誠不動兮自古未之有	至誠を尽くせば心を動かさない者は、古来一人もいないと、孟子は述べたが、
古人難及兮聖賢敢追陪	諸葛孔明等の俊傑には及ばないまでも、聖賢が求めたものを精一杯追慕したい。

安政の大獄が進行する中、萩の野山獄に入れられていた吉田松陰は、安政6年(1859)5月に江戸へ護送されることとなった。そこで吉田松陰の門下生達は、同じ門下の画家松浦松洞に師の肖像を描かせ、松陰の自賛をもとめた。同肖像自賛は5月16日の朝から、萩出発の前日である5月24日の夕刻にかけて、八ないし九幅が書かれたようで、現在そのうち七幅の所在が明らかである。なお、本肖像自賛は、明治になってから、画家狩野養州が模写したものである。



留魂録 安政6年10月26日 30歳 松陰在江戸獄 萩市郷土博物館蔵

「留魂録」は松陰が門下生に残した遺書である。処刑される前々日の25日から26日にかけて書きあげられた。大和魂を留めて七生報国すると念じた歌を巻頭においた十六節からなるもので、巻末に五首の短歌が添えられている。薄葉の半紙五枚を四つ折りにして、十九面に細書されている。至誠の限りを尽くして幕吏を説得する決意をもって江戸に来ながら、ついに成就しなかった。こうした結果を招いたのは自分の徳の罪薄さのためだとまず自責している。ついで、評定所における対吏の模様を詳しく述べたあとで、同囚の同志たちの動静を伝えて後起の人に期待をつないでもいる。また、人生を四季にたとえた人生観は、いつも死を前に据えながら思索し行動してきた人の言葉だけに強く心を打つ。その筆は、事実については淡々と冷静に、そして後起の者への訴えは切々と進められており、読む者の深い感動を誘う。

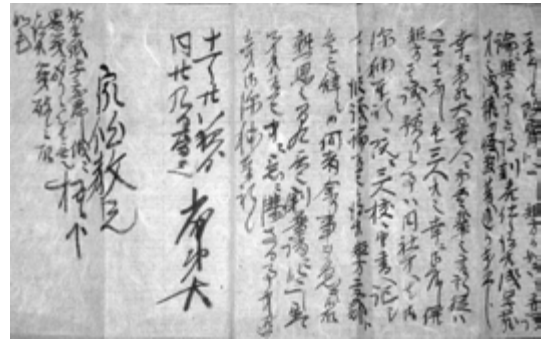


書簡類

兄梅太郎宛手紙 萩市郷土博物館 蔵

杉梅太郎（1829～1910）は松陰の半身であるといってもよい。松陰を歴史的人物とする隠れた力はその家庭にあるが、家庭の力は兄梅太郎を通じて最も多く松陰に働いたのである。少年の日、父母の膝下に、また叔父玉木文之進の私塾に相親しみ相励んだころから、その後の波瀾多き松陰の生涯に常に兄らしい温情と心遣りをもつて、形に添う影のように助け励まし続けた。

杉梅太郎は、字は伯教、名は修道、通称を後に民治と改め学圃と号した。嘉永元年（1848）明倫館居寮生となり、6年相州御備場の筆者役として江戸に行ったが、翌安政元年3月弟吉田松陰の下田踏海事件により五月帰国した。万延元年家督を継ぎ、御所帯方筆者暫役など藩政府の役職を歴任した。明治維新後は、当島宰判県令となって民政に尽くしたため、藩主から民治の名を与えられた。その後も山口藩郡用局大属・山口県権典事などを勤め、9年退職、11年隠居した。13年ごろから松下村塾を再興して塾主となり、25年秋の修善女学校長となって子女の教育に専念し、83歳で没した。

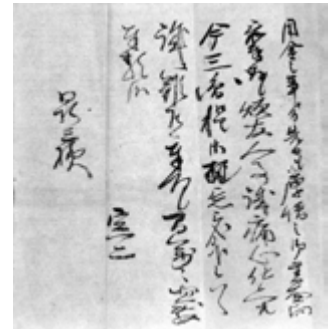


宮部鼎藏宛手紙 萩市郷土博物館 蔵

吉田松陰無二の親友。文政3年(1820)現在の熊本県上益城郡御船町生まれ。名は増実、号は田城。代々医家であったが、叔父に就いて山鹿流兵学を学び、30歳の時に肥後藩の軍学師範となった。翌年江戸で長州の吉田松陰と親交を深め共に東北諸藩を遊歴し、諸国の志士と交遊し尊皇攘夷の信念を深くした。吉田松陰の捕縛に伴い帰国。

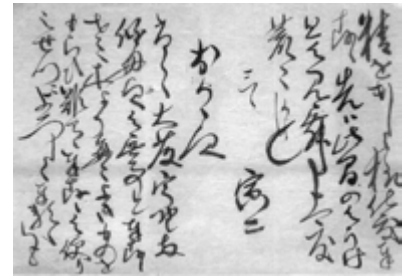
水前寺乱闘事件の罪で兵法師範職を廃されるが、出羽の清河八郎の来熊に奮起し、京都に上り細川藩に勤王の興起を促し、総督の三条公の下で總監に命じられるが、いわゆる八一八政変によりし三条実美ら七卿と共に長州に落ちる。

後に京都に潜入中、池田屋で新撰組に襲撃され自刃。享年45歳。明治3年、熊本藩招魂社に合祀され、同24年には正四位が追贈された。



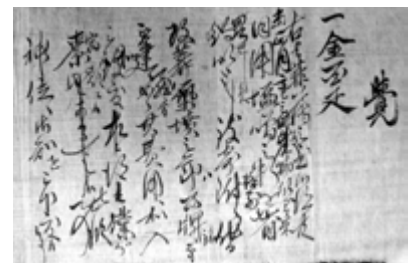
母滝子宛手紙 萩市郷土博物館 蔵

杉百合之助の妻は児玉氏（元・村田右中の三女）滝子である。文化4年（1807）生。20歳で嫁し3男4女の母。百合之助に仕えて40年。常に温容親切勤儉で感謝の生活を送り、特に至誠熱血の松陰を心から愛しその不遇に愛情を注ぐ。明治29年（1890）享年84歳で歿した。



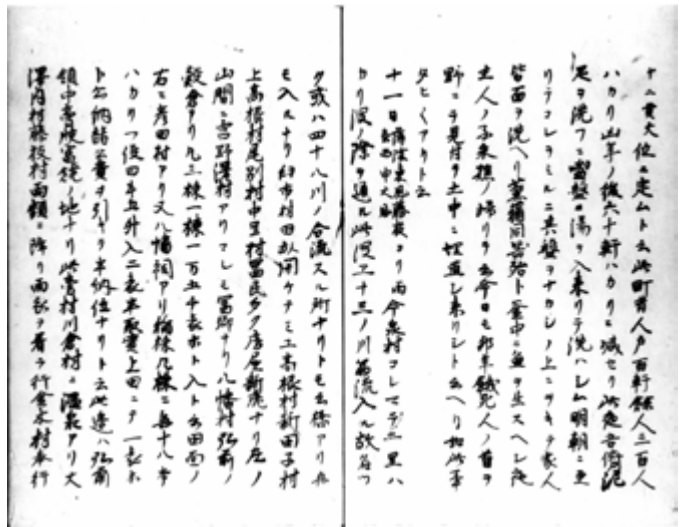
金子重輔遺族宛手紙 安政二年 松陰在野山獄 萩市郷土博物館蔵

安政元年3月、下田踏海の事を共にした金子は、江戸獄に於て病に罹り、翌年正月、萩の岩倉獄で斃れた。松陰が彼を悼む心は様々の形で表はされたがこれは日々の食料を節して、墓碑を建てる費用を助けようといふのである。蓋し當時士分の囚人は在獄中の食卓を自弁したのであつたから、節約をすれば払い戻しを受けるので、このような事が起きたのである。今日萩市保福寺にある金子の墓前には、一對の石製花筒がある。これこそ此の尊い金百足で作られたものであるといふ。花筒の表面には吉田氏の三字が刻んである。



(前略)

十一日 薄陰東風藤枝ヨリ雨表西申大風 今泉村コレマテ二里ハカリ瀉ノ際ヲ通ル、此瀉工十三ノ川筋流入ル故名ツク、或八四十八川ノ合流スル所ナリトモ云、橋アリ舟モ入ルナリ、白市村田畝開ケテミユ、高根村、新田子村、上高根村、尾別村、中里村、富民多ク房屋新麗ナリ、左ノ山間二宮野沢村アリ、コレモ富郷ナリ、八幡村弘前ノ穀倉アリ、凡三棟一棟一万五千表ホト入ト云、田面ノ右二彦田村アリ、又八幡祠アリ、稲株九株二毎十八本ハカリ、一役四斗五升入二表半取上田二テ一表ホト公納諸公費ヲ引キテ半納位ナリト云、此辺八弘前領中膏 富饒ノ地ナリ、此旁村川倉村二温泉アリ、大沢内村、藤枝村、雨頻二降り雨衣ヲ着テ行、金木村奉行所アリ、頭兩人下役三人勤番ナリ、此辺米価賤キトキハ一升十二文ハカリ、今年高価ニテ四斗五升人一表二十七匁、足百錢貫六百二十文、一升三十六文ナリト云、嘉瀬村此辺マテ八十三瀉ノ岸傍ナリ(後略)



木村謙次は、宝暦 2~文化 8 年(1752~1811)。江戸後期の北辺探検家。常陸天下野村生れ。名は謙、字は子虚、通称は謙次、また謙次郎、号は礼斎・酔古・愚鈍を名乗った。儒学を立原翠軒に、医学を谷田部東堅、原南陽に学び、天明 5 年(1785)北方事情の資料を求めて仙台・塩釜に旅行した。

また寛政 5 年(1793)には、水戸藩の内命を受けて武石民蔵と蝦夷地の海岸を踏査し、そのときの記録が「北行日録」である。寛政 10 年(1798)には、下野源助の変名で近藤重蔵に従い、再び蝦夷地に渡り、択捉島を探検し「大日本恵登呂府(えとろふ)」の木標を立て、領土権を確立したことで知られる。

菅江真澄

宝暦 4~文政 12(1754~1829)。姓は白井。幼名は英二、青年に達して秀雄、後年菅江真澄と称しました。三河国(愛知県)渥美郡に生まれ、天明 2 年(1782)に家を出て以来、生涯を旅に暮らしました。その間、多くの紀行、日記、随筆、図絵(名所、民具、発掘品等)、地誌、医薬関係の遺品などを残しました。

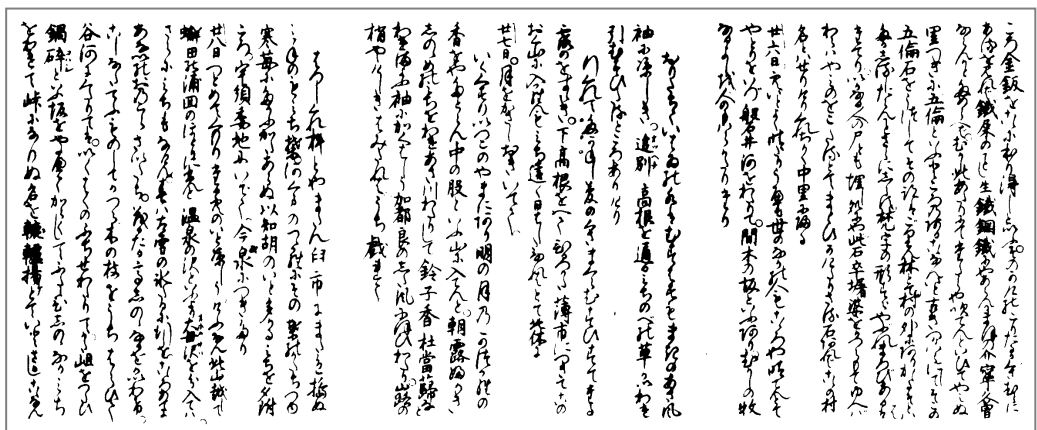
津軽には三度来訪し、最初は天明 4 年(1784)越後路(新潟)から秋田へ経て、同 5 年西浜から津軽へ入り青森に到達しています。二回目の来訪は天明 8 年(1788)で、盛岡から狩場沢を通過し、北海道へ渡るため宇鉄(東津軽郡三厩付)から船で渡道しました。

寛政 4 年(1792)北海道からの帰途、三回目の訪問を果たしました。以後下北半島・南部方面に約 3 年、津軽地方に 7 年、あわせて 10 年間近く青森県内に滞在しました。真澄がこの間に書いた日記は、相当な数だったと思われませんが、現存する 14 冊のうち、「外浜奇勝」と「錦の浜」には中里周辺の様子が詳細に記されています。



寛政 11 年(1799)

藩の採葉御用を免ぜられたのち、享和元年(1801)津軽を去り、以降死去するまで秋田に留まりました。文政 12 年(1829)角館神明社の神主鈴木淡路宅で没しました。

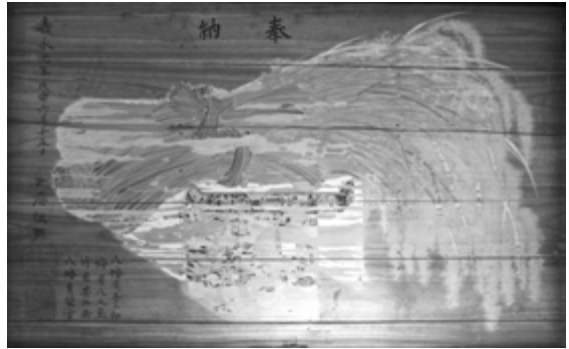


平尾魯仙

文化 5～明治 13(1808～1880)。幕末のころの津軽の画家・国学者で、嘉永元年に中里神明宮に奉納された絵馬の作者。名は亮致、通称初三郎(八三郎)。別号澄川、魯繩、宏斎、雄山など。弘前紺屋町の魚商小浜屋に生まれました。

幼時から学問を好み、松田駒水に経史、工藤五鳳・毛内雲林に画を学びました。また内海草坡に書法と俳諧を学び、百川学庵・今村慶寿(また溪寿とも)に師事しました。さらに鶴舎有節・今村真種らと平田派の皇学を究め、元治元年江戸の平田鉄胤の門に入りました。

自身の門下からも三上仙年・工藤仙乙はじめ、山上魯山、山形岳泉など後代の画家が輩出しましたが、考古学研究家の佐藤仙之(蔀)などを育てたことでも知られます。おもな著書に、民間の奇事異聞を集めた「谷の響」「合浦奇談」をはじめ、「松前紀行」「箱館夷人談」、幽府新論」「宏斎抄誌」などがあります。



蓑虫山人



天保 7～明治 33(1836～1900)。放浪の画人として知られる蓑虫山人は、天保 7 年(1836)美濃国(岐阜県)安八郡結村に生まれました。本名は土岐源吾、ほかに「蓑虫山人」「三府七十六県庵主」「六十六庵主」とも称しました。嘉永 2 年(1849)14 歳のときに郷里を出て以来、48 年間にわたって諸国を放浪し、その足跡は全国各地に残されています。生活用具一式を背い、時には折りたたみ自在の寝幌に一夜を過ごす山人の旅は、九州地方を手はじめに、中国・近畿・東海・関東を経て、明治 10 年(1877)北奥羽地方へ及びました。

北奥羽へは放浪の旅を終える明治 29 年(1896)まで毎年のように来遊し、佐藤蔀・広沢安任ほか多くの地元人々と交流を結びました。山人は、青森県をはじめとする北奥羽各地へ長期にわたって逗留する傍ら、名勝や文化財あるいは寄留先の様子などを詳細に記録しました。近代の北奥羽地方の雰囲気を実に伝えるそれらの作品群は、民俗学研究の一級資料として評価されています。

諸国歴遊の旅を終えた後は、名古屋市長母寺に寄寓する傍ら、自らが収集した資料を展示する「六十六庵」建設を構想しましたが、果たせないまま明治 33 年(1900)鬼籍に入りました。享年 65 歳。



武田源左衛門

承応 2～正徳 2(1653～1712)津軽藩士。明治 22 年誕生した武田村は、金木新田の開拓・治水などに功績のあった武田源左衛門に因んだものです。最初櫛引孫次郎を名のりましたが、後に武田源左衛門と改めました。小祿ながら、才器人にすぐれ、経済の才能に長じていたので、四代藩主信政にしだいに取り立てられ、延宝年間より、岩木川改修事業や新田開墾の総奉行に任じられ、いずれも成功を収めました。

貞享元年(1684)には元締役を命ぜられ、総奉行大道寺隼人繁清、補佐間宮求馬等と一緒に、いわゆる「貞享の検地」を担当しました。同検地は極めて厳密に施行され、総石高は寛文 4 年(1664)のものと比較して、112,000 石の増加となりました。元禄 3 年(1690)には元締役兼大目付に任じられるとともに、翌元禄 4 年には、五所川原堰の工事担当を命ぜられ、藤崎村から五所川原村まで長さ 1824 間、幅平均 2 間半の堰を開通させたほか、金木新田の開拓や治水に腕を振るい、数々の功績を挙げました。ところが元禄 9 年には、元締役・大目付等諸役を免ぜられ、手廻番頭となります。さらに信政が没し、信寿が五代藩主となって間もない正徳 2 年(1712)には、笹森勘解由左衛門へお預けとなり、その年の 2 月 13 日に、その子次部左衛門とともに、切腹を仰せつけられました。その理由については、己が功を樹てんがため上をないがしろにし、京及び大坂に於ける勤方不届の至りであるとされていますが、真相は不明です。菩提寺海蔵寺。没年 60。



尾別薬師堂奉納俳句額 嘉永5年(1848)

尾別薬師堂は、尾別字湯島に所在する。薬師堂付近にはかつて「薬師湯」と称する温泉があったとされる。昭和八年『津軽一円縦横行程記(加藤氏蔵)』に

一、尾別村湧湯有

とあるほか、天保十一年『万覚書』においても

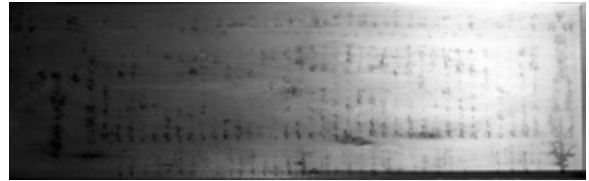
外浜奥内、同六枚橋、尾別村、今別村の湯ノ沢、川倉村、本郷村の湯ノ沢

右六ヶ所は 湧湯ヌルク湧き故、ワカシテ用フ也

とあることから、附近に湧出する鉱泉を利用した温泉だったのであろう。土用の丑の湯の時は、近郊近在から多数の湯治客が訪れたとされ、恐らく、その温泉に勧請したものが尾別薬師堂と考えられる。昔の堂社は火災で焼失し、現在は小さな祠がある。そこに嘉永元年奉納の俳句額が残されていた。

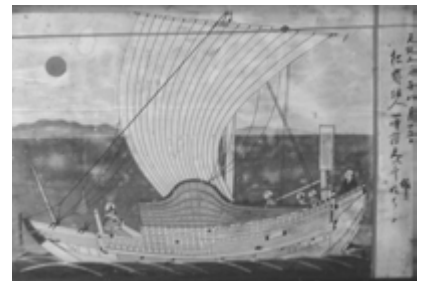
願主 尾別村 米屋重助 同苗稿太郎謹言とあるのは、現在の宮越家の先祖であり、湯元の経営者と考えられる。

奉納句の俳人たちは、湯治客と推定されるが、桑野木田村一人、上古川村一人、十三町二人、八幡村一人、深郷田村二人、中里村五人計十二人で三十六句を奉納している。当時の庶民の風流が偲ばれる貴重な資料である。



猿賀神社船絵馬群 富野猿賀神社 蔵

猿賀神社は、中里町富野に所在する天台宗般若寺境内の一隅に位置する。詳しくは「猿賀深砂大権現」と称し、由緒資料等によれば、文化4(1807)年に建立が許され、文政8(1815)年尾上町猿賀神社より分霊されたと伝えられている。同神社のかたわらを通れる岩木川では、古来より大正年間ころまで河川交通が盛んで、十三湖を介して日本海への海運ともつながっていた。その船主や船頭たちが、航行の安全を祈願して奉納したものが「船絵馬」である。猿賀神社には、奥津軽一円から北海道松前まで広域にわたる人々によって奉納された船絵馬88枚が一括して保存されており、中里町文化財に指定されている。



船絵馬の奉納者は、岩木川上流部が少なく、小泊・十三・北海道方面が卓越する。これらの分布状況は十三湊を利用する船の活動範囲を示すものと考えられる。天保2年の船絵馬は「松前住人蒔苗文次郎娘ちよ」の奉納であり、父が船乗りで航海の安全を願っての奉納と推定される。

おもに江戸時代後期から明治時代末にかけて奉納された船絵馬は、百年あまりの歳月を経ているにもかかわらず、今なお鮮やかな色彩をとどめており、往時の水運や船体構造に関する資(史)料として、あるいは“下の猿賀様信仰の一面を示す民俗資料として重要な情報を提供することでしょう。”

工藤他山

文政元~明治22(1818~1889)。教育者・歴史学者。旧姓古川主膳、通称富太郎。他山、拙齋、坦々齋、梨窓陳人などと号した。弘前藩士古川儒伯の二男として、弘前古堀町に生まれ、天保3年(1832)15歳で稽古館に入学、その後若くして同館典句、助教となったが、弘化2年(1845)助教を辞して江戸・大坂に遊学した。



帰郷後の嘉永5年(1852)中里村に隠棲し、寺子屋を開いて子弟を教授するとともに、中里村敦賀源次郎の娘磯子と結婚し、長男隼太、次男覚蔵(後の外崎 覚)が生まれた。

その後青森鍛冶町の寺子屋を経て、慶応3年(1867)稽古館に招かれ助教に就任、その一方で弘前市五十石町に私塾思齋堂を開講しました。明治3年(1870)一等教授へと昇任したが、同5年には稽古館教授を辞し、私塾向陽塾の経営に専念した。明治の政論家陸羯南は当時の門弟である。

同10年東奥義塾開校とともに招かれて教授に就任、同17年同塾を辞して津軽藩史編さんに専念した。同22年2月没。72歳。

